初回面接の翌朝、自殺未遂をしたクライアントへの援助を振り返る

事例提出者

Ｔさん、在宅介護支援センター・ソーシャルワーカー（ＳＷ）

事例の概要

Ｆさん、76歳、男性

世帯形態

ひとり暮らし。妻とは30年ほど前に離婚。子どもはいない。

生活歴等

関西地方で生まれ、戦後間もなく県内に移住。大企業の工場で働く。現在、古い賃貸アパートにひとり暮らし。元部下に恵まれ、血を分けた親子のような深い付き合いをしている。近所付き合いは良好。温厚、実直で、物腰低く、礼儀正しく、人当たりのよい方に見受けられる。

今のアパートには、およそ20年暮らしているが、今年いっぱいで取り壊しが決まっている。

経済状況

当初の説明では、貯金100万円と月12万5000円程度の年金生活（面接するなかで、実際の貯金額は80万、70万と下方修正され、最終的には30万円しかないことが判明）。

健康状態

ＡＤＬは自立。健康状態良好。胃腸が弱いが、特に目立った病気などはない。痴呆などもなく、非常に聡明で、見た目には60歳代半ばくらいの若さに見える。

紹介経路等

平成12年５月13日

余生をゆっくり暮らす予定だったこの部屋が年末に取り壊される、との話を大家から突然言い渡された。この歳で新たに部屋を貸してくれるところはないだろうと悲観し、かなり動揺する。また、預貯金も残りわずかになってきており、一気に不安が募ったところに、頼みの綱の元部下との約束の行き違い（アパート探しに行き、保証人になる約束。単に約束の日を間違えただけだったが）に、本人は「裏切られた」と認識。毎日のように顔を見せる元部下の娘（11歳）も、行事でたまたま顔を見せなかった。

そのまま２、３日が過ぎ、本人は見捨てられたと思い込み、自分の身の置きどころを探し、

スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します（検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えのない範囲で変更させていただきました）。

海や山をさまよったらしい。

5月16日

本人から担当民生委員へ相談が入り、自殺をほのめかす言動がある。民生委員も危機を感じ、「なんとか解決の方法はないものか」と支援センターに連絡が入った。

5月17日

16時、民生委員と同行訪問。

援助経過

5月17日

16時、民生委員と同行訪問。民生委員が「Fさーん、居りますかー」と一声かけ、部屋をノックする。「はーい、どうぞ」、と待ち構えていてくれたような声。

①民生「Fさん、どうね、変わりないね？　今日、支援センターのTさんが来てくれたよ」

②SW「こんにちは、はじめまして。在宅介護支援センターのTと申します。よろしくお願いいたします」

③F氏「お忙しいときに申し訳ありません。ホント、すみません」

④SW「いえいえ、とんでもありません。民生委員さんから少しはお話を聞いていますが、今日はFさんからもう少し話を聞かせていただいて、一緒に今後の生活のことを考えさせていただこうと思います。よろしくお願いします」

⑤F氏「こちらのほうこそ、お願いします」

⑥民生「Fさん、上がらせてもらっていい？」

⑦F氏「あ、どうぞ。汚いとこですけど、どうぞどうぞ。こちらへ」

畳の部屋へ通される。部屋はきれいに片づけられており、荷物も概ね一まとめにされている。赤ん坊のかわいいパネル写真が壁に掛けられている。

⑧SW「こちらでよいですか？」

座る場所を確認。

⑨F氏「はい、あ、座布団、座布団」

⑩SW「結構ですよ、大丈夫です。身につけてきてますから、ホント」

なごんでいただき、お構いを丁重に断るためのいつもの台詞。

⑪F氏「そうですか？　民生委員さんにも」

⑫民生「いいんよ、なんも気にせんで、私も身につけてきたわ」

皆で笑う。

⑬SW「ホント、私、遠慮しませんから、座って、お話をゆっくり聞かせてください」

⑭F氏「では」

正座される。肩を上げ、首をすぼめて恐縮した様子になっている。

⑮SW「あのー、Fさん。あらためまして、在宅介

護支援センターのTと申します」

名刺を差し上げ、簡単に支援センターの紹介。

⑯民生「Fさん、だから遠慮せんで、この人になんでも言っていいんよ。私に言った悩みをTさんに言って、どうにかしてもらいましょうよ、ね。ほら、そう硬くならんで」

⑰F氏「はい、すみません」

数秒、沈黙。

⑱SW「Fさん、この写真はお孫さんですか？　かわいいですね」

壁にかかっているパネル。

⑲F氏、やっと首をもち上げ「いえ、他人の子です。この前までここに遊びにきよったんですが、ちょっといろいろあって来ないようになってね。生まれたときから、子守りやら遊びに連れていったりしよったんですけどね。もう、これも片づけないけん」

1990年の日付が入っている。今この子は11歳ぐらいか。

⑳SW「片づけるなんて。かわいい写真じゃないですか、ねえ。それで、どんないろいろでこなくなったんですか」

㉑F氏「いえ、それはたいしたことないんです」

沈黙。

㉒SW「いま、子どもも塾とか、学校行事も多くて忙しいから、そういうのじゃないですか」

㉓F氏「いえ、そうじゃないです」

㉔SW「そうですか」

気まずい雰囲気になる。もう少しそこを掘り下げるか、考えたが、

㉕SW「さて、Fさん。今日は、民生委員さんと、こうして寄らせてもらいましたが、まず、Fさんがいま一番困られていること、悩まれていること、そう言ったところをお聞かせください。そのうえで、今後どのように生活していきたいのか、ご希望や夢などもお聞かせいただいて、お手伝いできる部分や、私の知りうる情報を提供させていただこうと思います。よろしいでしょうか」

㉖F氏「はい、ありがとうございます。Tさんね、私、もうこの歳ですし、夢とか希望とか、そうそう言っている歳じゃありません。だから、まあ私も考えなくては、と思ってるんですけど。実はね、私ね、Tさんのこと以前から存じ上げておりました。私ね、お腹壊したり、検査したりと、ずっとA病院にかかってたんで。お見かけしておりました」

㉗SW「あ、そうでしたか。A病院の患者さんだったんですね。そういえば、お名前聞いたことあるような、と思っていたんです。そうですか、それは、ありがとうございます」

㉘F氏「それでね、A病院に私、よく知っている看護婦さんがいてね、その人、うちによく来てくれて、声かけてくれてね。困ったときにはこういう人がいるから相談すればいいんよって言われてたんです。それで知ってたんです」

㉙SW「そうだったんですか。その看護婦さんはどなたですか」

㉚F氏「いえ、まあ、こないだちょっとごたごたがあって、それからもう行き来がなくなって。それまではホントよくしてくれてたんですけど、急に裏切られて……」

㉛SW「どういうことですか？」

A病院のどの看護師のことだろう。

㉜F氏「いえ、私、今日、正直に言いますけど、この家が取り壊されるんで、出なくてはならないんです。それで、こないだ家探しに連れてっちゃると言ってたのに、その友達が保証人のこととかも、なっちゃると言ってたのを急になんか断られて。連絡も取れなくなって、もう、いいってことになってるんです。で、もう私もそう長くは先がありません。ですから、ずっと看てくれるところに入って、そこで安心して暮らしたいんです。お金が、こうなくなってくると、ホント不安で、もう生きている意味がないごとあります」

会話から、その友達の妻（看護師）の子どもがパネルの赤ん坊とわかる。

㉝SW「そんなー、Fさん、そんな生きている意味がないなんてことないですよ」
㉞民生「そうよ、そんなこと言ったらいけん。Tさんね、この人、それから山とか海とか行ったって言うんですよ」
㉟SW「海とか、山とかって」
㊱F氏「ホント、人間、家は出らなならんわ、信用してた人からはこんな仕打ちに合うわ、こんなことになるとは思わんかった。真剣、信用してたのに、急に裏切られて。そうなったら生きてる甲斐はないですよ、ホント。だから私、死に場所探して歩き回りました。でも、なんか死にきらんかった」
㊲SW「そんなに切羽詰まってたんですね」
沈黙。
㊳SW「でもね、Fさん。それは絶対してはなりませんよ。写真の子どもさん見てくださいよ。この間まで慕ってたんでしょ。Fさんもかわいいんでしょ。そのFさんが急にそんなことなったら、この子かわいそうじゃないですか。こんなかわいい子をFさん、悲しませたくないでしょ？」
㊴F氏「もう関係ないけん、親も来させんのやから、悲しいとか思わんですよ」
泣かれはじめた。
㊵SW「いいえ、そんなことありません。なんかの行き違いということもあるかもしれないし、いまから来るかもしれなじゃないですか。それは絶対しないことを約束してください」
㊶民生「そうよ、Fさん。私からも頼むから」
㊷F氏「みなさん、すみません。すみません。迷惑かけます」
㊸SW「約束ですよ」
数秒以上、沈黙。
㊹SW「さて、少しここでFさんのことを教えてください」
妻とは40代のころ離婚。20年来住んできたアパートが今年いっぱいで取り壊しになる。どこにも行く先はなく、途方に暮れているという状況がわかる。
㊺SW「住まいは、具体的にどこか探されてたようですけど」
㊻F氏「はい、でもやっぱり家を借りて住むというのは、お金のことが心配で、私、年金生活やから、それだけで足りんで、いま食いつぶしてきよって、もう100万ぐらいしか残りがなくて。もう、普通のアパート借りたりすると、いろいろでお金がなくなるから、借りきらんのです」
この100万円は、その後下方修正され、２週間後には30万しかなかったことが判明する。
㊼SW「そうですか。それで、Fさんがいま考えている具体的な方法が、老人ホームの入所ということになっているんですね」
㊽F氏「それで、私は入れるんでしょうか？　お金がないけど。やっぱり、無理でしょう？」
㊾SW「ここは、いつ取り壊されるんですか？」
㊿F氏「年末です」
(51)SW「ならば大丈夫です。私がなんとか探します。きっとあります。意外と早くあるかもしれません。大丈夫です」
(52)F氏「ホントですか、ありますか。よかったー。もうお任せしますのでお願いします」
(53)民生「よかったねー、Fさん。あるって」
(54)F氏「ああよかった。ホント大丈夫なんですね。ああよかったー」
(55)SW「大丈夫です。安心してください」
帰宅

実際には、ケアマンションは市内はいっぱい。年末までに入れる保証などなかった。でも余裕を見せ、大船に乗せた。ただ、他市でもいいとのことで、探す枠は広く、ケアマンションから探し始めた。その夕方、他市で１カ所ケアマンションを確保した。急いで本人に連絡。喜んでもらえると思ったが、断られた。月々は払

えても、最初の敷金（50万円）が払えないという。さあ、これで打つ手は、軽費老人ホームのみか？　だが、市内はいっぱいで空きがない。

次の日の朝、他市に軽費老人ホームを１カ所見つけた。喜び勇んで一報を入れようと９時からずっと電話をかける。しかし、何度かけてもつながらない。散歩にしては長すぎる。10時30分、胸騒ぎがしながら１件面接を済ませ、「一度伺ってみるか」と同僚に言っていたところへ、電話がかかる。

「Ｔさん、Ｂです」、母体病院の看護師の声。ひょっとしてと思った瞬間、「Ｆさんのこと知っていますか」

ＳＷ「知ってる！」

Ｂ「Ｆさん、自殺した！」

ＳＷ「ヤッター、オレ、コロシテシモウター」

大声で叫んだ。我を忘れた。

Ｂ「大丈夫！　生きてる！　私殺していない。とりとめたよ。安心しよ、大丈夫！」

震えた。涙が出た。後は真っ白になって、搬送先の病院へ無我夢中で走った――。

その後、Ｂ夫婦が、Ｆさんと行き違いになった経緯を話してくれた。大したことのない、勘違いだった――我々にとっては……。

昨日Ｆさんは、ＳＷが帰ったあとすぐに、ＳＷが来てくれたという連絡をＢさんのところにしたという。とても喜んで話していたらしい。その後、ＳＷが料金の高い施設を紹介したことにショックを受け、またＢ宅へ電話をしたが、話がうまくまとまらず、翌朝６時、自殺未遂。

現在、Ｆさんは軽費老人ホームに入所している。本人は、「ＳＷに申し訳ないことをした」と言ってくれるが、自分が恥ずかしい。いま、Ｆさんは幸せなのだろうか。ほかに考えなくてはならなかったことはなかっただろうか。

ケース検討会

奥川　（Ｔさんがプレゼンテーションの最中に涙を流したのを受けて）まだ１年前の事例ですから、Ｔさんのなかでかなりきつい経験として残っているようですね。

Ｔさん　私も自分で涙が出てくるとは思っていなかったのですが……。

奥川　Ｔさんとしては、クライアントとの間でどんなことが起こっていたかを検討したいと思ってこの事例を出されたのでしょう。ですが、今のＴさんの状態からすると、まだえぐるような深い検討はしないほうがいいでしょう。また、もしそのことがＴさんのなかでとても重要な問題であるなら、しかるべき時期に個人スーパービジョンでやったほうがいいと思います。

そこで、今日はＴさんが用意してくださった逐語録をもとに、Ｆさんとの面接についてチェックすることに主眼を置きたいと思いますが、いかがですか。

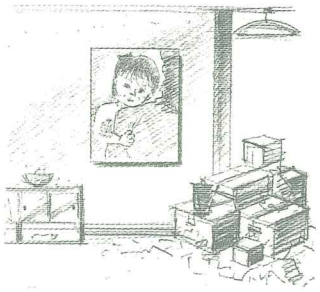
Ｔさん　わかりました。よろしくお願いします。

面接の導入の仕方

奥川　では、まず㉔までについて検討していき

ましょう。

発言　ひととおり挨拶が済んだ後、数秒沈黙があって、⑱で写真のパネルに話を振っていますが、これはどうしてですか。



Tさん　Fさんがとても緊張していらして、堅かったので少し雰囲気をほぐそうと思って話題づくりのためにパネルを使いました。

奥川　面接の導入の時によく使う手段ですね。

発言　逐語録を読んでいて、私だったらそうはしなかったと思いました。というのは、民生委員さんからすでに、「Fさんは家の問題で生きるか死ぬかの思いをしている」と聞いているわけですから、ストレートに「お家のことで困っているとお聞きしましたが」と入ってもよかったのではないでしょうか。

発言　う～ん、そこは難しいところで、かなり緊張しているクライアントにいきなり核心から入ると、余計に堅くなってしまって突っ込んだ話ができなくなってしまう場合もあると思います。私は、こういう引き継ぎケースでは、引き継いでくださった方、このケースだと民生委員さんに「どんなふうにお話をお伺いしたんでしたっけ」と話を振っていくことが多いです。

奥川　核心部分への入り方ですね。クライアントといきなり対峙するように話題をもっていくのではなく、すでに顔見知りで媒介者となっている民生委員さんに話をしてもらうことで緊張をほぐしていくということですね。

面接としてはどちらもありなんです。これは援助者側のキャラクターやクライアントのタイプ、問題の状況等によって変わってきます。

ここでは、Tさんはとっかかりのつもりでパネルの話をしたのですが、また沈黙になってしまいました。この部分を考えてみてください。

発言　⑲の「他人の子です」というのは、どんな言い方でしたか。

Tさん　寂しげな顔で、「他人の」という部分を強調する感じでした。

奥川　しまった、と思いましたか？

Tさん　地雷を踏んでしまった（笑）、と。

奥川　同じ⑲の「片づけないけん」という言葉を聞いたときは、どう感じましたか。

Tさん　言い切ったわけではなくて、未練が残っている感じでした。寂しいというか、心のよりどころというか、とても愛情をもっている存在なんだなと感じました。

奥川　それを素直に言えばよかったんですよ。

発言　ここで写真の子どもの話を突っ込むということでしょうか。

奥川　いえ、この時点で無理に突っ込む必要はないんです。とりあえず、相手の言葉とその裏側にある複雑な思いをキャッチしたら、「外すに外せないんですね」といったように受けるとい

うことです。そこでFさんが、「実は……」と始めたら、もちろん自然な流れにまかせて話を聞きます。Fさんが乗ってこなかったら、その情報を引っかけておくんです。ああ、この写真はFさんにとって意味をもっているんだな、愛着と葛藤があるんだな、というように。そして、後でつながりのある場面が来たら、それを取り出して聞くのです。そうやって情報と情報を結びつけることで、パネルの「意味づけ」をしていくわけです。

Tさん　このときは、とにかくどんよりした気まずい空気が流れて……。

奥川　おたおたしちゃったんですよね、㉒の台詞なんかは。

Tさん　はい、もう目が泳ぎながら言っていたと思います（笑）。

Fさんはどんな気持ちだったのか

奥川　では、㉕〜㊲について見てみましょう。横の方とペアになって、ちょっとロールプレイをしてみてください。

・2人ペアになってロールプレイをする。

奥川　このときのFさんは、どんな気持ちだったと思いますか。

ペア①　FさんはTさんに親近感を抱いていて、とにかくいろいろと話を聞いてほしいと思っていたのだけれども、だんだん話が死ぬ・死なないというほうに流れていってしまったように感じました。

奥川　それはどうしてだと思いますか。

ペア①　㉜の「生きている意味がない」という部分に反応してしまったからでしょうか。

奥川　そうですね。面接は生き物なので、どの部分に反応するかで話の展開する方向が変わってきます。㉝から話の流れが生き死にのほうに向かってしまいましたね。

そちらのペアはいかがですか。

ペア②　㉖と㉘の台詞で、FさんはTさんのことを以前から知っているということで、Tさんに親近感を抱いていたことを伝えようとしていると感じました。ところが、Tさんのほうからは、その点についてははかばかしい返事がもらえなかったので、ちょっと失望したような気持ちになった部分があるのではないかと思いました。その上、話が看護婦さんにいってしまったものだから、二重に裏切られたような気持ちになってしまったんじゃないでしょうか。

奥川　おそらく、Fさんがふつうの状態だったら、TさんがFさんのことを知らないというの

は理解できたでしょう。でも、このときは危機状況にあったので、二重の疎外感を抱いてしまったのかもしれない──。

Tさん　そうかもしれないですね。難しいです。

ペア③　いまの㉘のFさんの言葉を受けるときに、「その看護婦さんはどなたですか」と返すのではなくて、「そうだったんですか。看護婦さんと仲良くされていたんですね」という受け方をしていたら、Fさんも「そうなんですよ」と展開していったような気がしました。

Tさん　なるほど。

ペア③　㉜の台詞に対しても、「生きている意味がない」とおっしゃったら、「そんなことないですよ」ではなくて、「どうしてそう思われるんですか」という聞き方をしたら、Fさんとしてももう少し話を続けられたのではないかなと感じました。

奥川　Fさんの話を否定するような応答をしなければ、別の展開になったのではないかということですね。

ペア④　同じ部分ですが、「死にきらんかった」というのは、ハッピーなことだと思うんです。だから、そのことを言ってあげたら、また違ったかなと思いました。自分が死なないことを喜んでくれる人がいるというのは、嬉しいことなんじゃないでしょうか。

奥川　皆さん同じところを指摘してくださいましたね。㉜の言葉をどう受けるか。ここがこの面接の勝負どころなんです。もう一回やってみましょうか、Tさん。

Tさん　はい。

問題の中核は何か

奥川　では、どなたかFさん役になって、㉜の台詞を読んでみてください。

Fさん役　「いえ、私、今日、正直に言いますけど、この家が取り壊されるんで、出なくてはならないんです。それで、こないだ、家探しに連れていっちゃると言ってたのに、その友達が保証人のこととかも、なっちゃる。って言ってたのを急になんか断られて連絡も取れなくなって、もう、いいってことになってるんです。で、もう私もそう長くは先がありません。ですから、ずっと看てくれるところに入って、そこで安心して暮らしたいんです。お金が、こうなくなってくると、ホント不安で、もう生きている意味がないごとあります」

奥川　読んでいてどんな気持ちがしましたか。

Fさん役　自分でも何を訴えたくて、どれが本当に言いたいことなのかが、言えば言うほどわからなくなるような感じでした。

奥川　Fさんは明らかに混乱していますよね。こういう時は、どうやって返せばいいと思いますか、Tさん。

Tさん　「どういうことでしょうか」と聞き返すとか──。

奥川　そう、混乱しているFさんに、もう一度考える時間を渡すということですね。Fさんが言ったことを簡単に要約して、反射するともっといいでしょう。ところで、いま台詞を読んで

いて、Ｆさんは本当に死にたいと思っていると感じましたか。

Ｆさん役　友達が保証人になってくれる話がダメになったとか、家が取り壊されるということで絶望的な気持ちにはなっていると思うのですが、最後に「ずっと看てくれるところに入って、そこで安心して暮らしたいんです」と言う人は、決して本気で死にたいとは思っていないんじゃないかと感じました。

奥川　では、安心して暮らせるところに入りたい、と思うようになった一番大きな理由は何でしょう。家の取り壊しですか。

発言　違います。

奥川　Ｔさんは、もうわかりましたよね。

Ｔさん　愛情をいっぱいに感じていた人と疎遠になってしまったこと。

奥川　そう。Ｆさんが死にたいと思って海や山をさまよったというのも、すべてそこから発していますよね。Ｆさんの問題の中核はそこなんです。私たちは、そのことを面接のやりとりのなかでつかまないといけないんです。

Ｔさん　この面接は、ずっとかみ合っていないというか、看護婦さんの話が出たのでそっちに振ると「いいんです」となったり、表面だけを滑ってつかみどころがない感じでした。

奥川　たしかに、Ｆさんはわかりやすい方ではないと思います。でも、この人は本当は何を言いたいのだろうと、内容の反射をしてＦさん自身にも整理をしてもらったりしながら、心の耳を澄まして聞いていけば、パネルの子ども──

看護婦さん──保証人になってくれると言った友達と連絡が途絶えた──ごたごたがあった──急に裏切られた──生きている意味がない、といった一連の情報から、Ｆさんが最も気にかかっていることが浮かび上がってくるんです。そうすれば、先ほど皆さんが言ってくださったように、㉜の言葉の受け止め方も違ったものになったはずです。

Ｔさん　はい、とてもよくわかりました。

奥川　そうなれば、その後の展開も全然違いましたよね。

Ｔさん　はい、まったく違いました。自分が目先の住宅の問題にだけ気をとられて、肝心要の問題についてはまったく手当てできていなかったということがよくわかりました。

奥川　今日はいい勉強をさせていただきましたね。では、最後にＴさん、感想をどうぞ。

Ｔさん　皆さんにサポーティブに検討していただいたおかげで、問題がどこにあったのかがはっきりとわかりました。もし、今日検討していただかなかったら、トラウマになって一生引きずっていたかもしれません。私にとってＦさんは、大事な原点となるクライアントだと思っています。今日は本当にありがとうございました。